

「朝日新聞の報道」

2014年09月14日

「朝日新聞」は無残である。「従軍慰安婦」問題で虚偽の報道をしたと訂正した。吉田清治氏の日本軍によって強制的に従軍慰安婦にされたという証言を受け入れ、スクープ記事として大きく報道した。吉田氏は講演や著作でも同様なことを語っている。しかし、吉田証言は虚偽であったことが判明して、二日に渡り大幅に紙面を費やし取り消した。そこに、謝罪の言葉はなかった。吉田証言の確証を取らずに、センセーショナルに報道したということである。朝日新聞の虚偽報道を巡って、ジャーナリズムは喧々諤々である。誤った報道に対しては訂正と謝罪は当然で、訂正と謝罪が遅れたことは非難される。しかし、朝日新聞へのバッシングは常軌を逸している。朝日新聞の誤った報道が世界からの日本批判をもたらし、「従軍慰安婦」は商業行為であったとして正当化したり、あるいは、なかったかのような主張さえある。「河野談話」で語られているように、軍の関与があり、不当な人権侵害があったことは取り消すことはできない。吉田証言に関わりなく、慰安婦にさせられた彼女たちへの謝罪と償いは必定である。非情な仕打ちを受けた元慰安婦たちの証言は何よりも重い。

池上彰氏が、朝日新聞の訂正が遅れ、謝罪がなかったことをコラムで書いたが、それを掲載しなかった。新聞社は掲載の有無についての選択権は持っている。しかし、言論機関は多様な主張を報道することは当然の責務であろう。後日掲載された池上氏のコラムは常識的な主張で、これを拒否した朝日新聞はまともな判断を失っていたと言うしかない。最近の世相は批判を受け入れない不寛容さが見られる。批判者との対話の中から、明日を作る知恵が生まれてくる。ジャーナリズムの偏狭さは自らの首を絞めることになる。

続いて朝日新聞は、福島原発事故に関する「吉田昌郎所長調書」にも誤報があった。吉田調書を誤読し、原発従業員の9割が、吉田氏の命令に従わず、第二福島原発に逃げ込んだとスクープとして報道した。事実は、吉田氏の退避勧告を受けて、従業員は、第二福島原発に移動したということであった。命令に従わず逃げたことと退避勧告を受けて移動したことは、大変な違いである。事実と違って逃げたと報道されると、命をかけて守ろうとした従業員にとっては、耐え難い屈辱である。現場に行って、事実関係を取材しなかった朝日新聞の落ち度である。

8月15日の敗戦記念日の集会に参加し、その後、靖国神社に行ったことがある。初老の方が数人、朝日新聞の報道は偏っていると大声で話していた。朝日新聞は、権力をチェックするリベラルな立場を取っていることを自負していただろう。しかし、ジャーナリズムの根幹である「現場主義」をないがしろにしたのではないか。朝日新聞の誤報と対処は、失態を重ね、信頼を大きく失った。

筑紫哲也氏は少数者の立場にいつも立ってきたと言っていたが、ジャーナリズムは弱い立場の人に寄り添い、彼らの声を代弁することであろう。最近のメディアは権力に媚び、国民も大勢に物言わぬ状況になっているのではないか。可能な限り事実を知り、批判的な主張が聞こえる社会であってほしい。しかし、誤報と隠蔽に囲まれていることを知っておくべきである。原発事故後の政府と東電の報道は信頼に足るものが、どれだけあったらうか。特定秘密法は国民の目と耳と言葉を奪う恐ろしい状況をもたらすのではないか。